慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	炎凉岸・女開科傳・知不足齋原本批點聊齋志異
Sub Title	Yen Lian'g An, Nü k'ai k'ê Chuan and Liao-chai chih-I (The original text of Chih-pu-tsu-chai)
Author	藤田, 祐賢(Fujita, Yuken)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1957
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.7, (1957. 12) ,p.117- 120
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00070001-0117

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料紹介

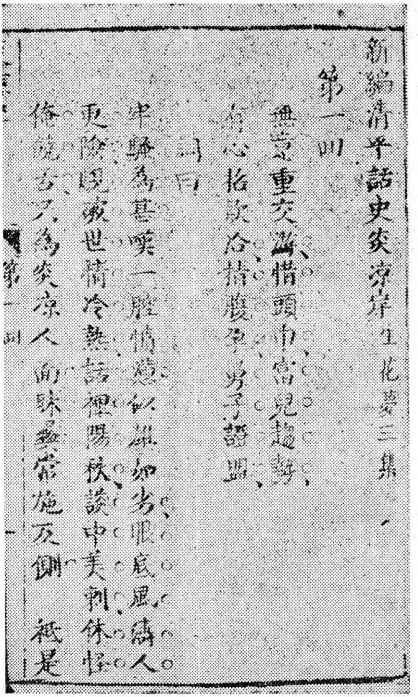
炎凉岸
女開科傳
知不足齋原本批點聊齋志異

解題　藤田祐賢

「炎凉岸」刊本　一册

表紙大きさ縱二二・二糎、横一二・六糎。全一二八丁、内目次二丁、第二回末に落丁がある。外題は「生花夢」と墨書し、卷頭目錄題並びに内題は「新編清平話史炎凉岸」と題す。目錄題下に「生花夢」、内題下に「生花夢三集」と夫々小字で刻し、また改行して「娥川主人編次」「青門逸史點評」と二行に見えている。本文は左右双邊、無界、匡郭縱一八・五糎、横一一・一糎、毎半葉八行、毎行二〇字、回毎に丁付が改まる。版心は白口で、丁數、回數の外に「炎凉岸」と刻してある。所藏印は風月堂澤田一齋の「奚疑齋藏書」、藏書家渡邊刀水の「刀水書屋所藏圖書記」「快馬渡水」の各方形朱印。

本書は淸代の全八回の通俗小說で、撰者は不明。わが國の寛政辛亥（一七九一）發行の秋水園主人「小說字彙」の援引書目に「炎冷岸」という書名がみえるが、これは本書と同じものであろう。孫楷第「中國通俗小說書目」（新版）によると、大連圖書館にこの書の日本抄本がある。孫氏の書目には別に、「古吳娥川主人編次」「青門逸史點評」と題し、青門逸史の序（癸丑の序であるが、この年が雍正一一年〈一七三三〉に當ることが、前記「小說字彙」の發行の年が乾隆五八年であることによつて、決定される）のある「生花夢」（四卷一二回）という刊本の名が見られるから、「生花夢」とは叢刻の總名で、「炎凉岸」はその第三集であつたとみて誤りないであろう。本書は世態人情の輕薄を主題とした一種の離合集散物語で、初めに、豆腐屋の娘と結婚すべき運命にあつた貴公子がその結婚を嫌い家來の奸策で娘を殺させるが、死んだと思つた娘は盜賊の手で助けられ、後に貴公子と結婚することになり、公子は一度陰隲を破つたために冥罰を受けて死ぬという入話がある。本筋は、田舍の金持


新編清平話史炎京岸 生花夢三集
第一回
無意重交淄惜頭巾宮見趨勢
有心拾欲合指腹爲男子語盟
詩曰
半驛爲甚咲一腔情趣似難如多眼底風塵人
更險見夜世情冷熱話裡陽秋談中美刺休怪
作說古人爲炎京人面眼無常施反側 紙是
第一回

の馮國士が自分の立身出世を思つて撫院吏書の袁七襄と交を結び腹中の子供同志の結婚の誓をたてるが、馮が進士になると、袁との身分の懸隔を嫌い、義弟の奸策で以前の誓を破棄し、それが原因となつて次々に事件が起り、袁一家は夫婦、親子が離散するうき目に遭うが、後に袁は皇帝の目に止つて出世し、馮は官位を減等され、袁の子も出世して、父母の命に背いて尼となり義を守つていた馮の娘とめでたく結婚するという話で、明の弘治、正德年間の事として語られている。全八回中、袁の妻が盜賊の危難に遭遇する第三回は、「粉粧樓全傳」に見られるような場面轉換の巧妙さで、通俗小說としての著しい效果を擧げている。本書は慶應義塾大學圖書館の所藏である。

「女開科傳」刊本　四册

表紙大きさ縱二二・三糎、橫一二・六糎。藍色紙の題箋に「女開科傳　伊蘆州藏（印）　春（夏、秋、冬）」と金泥で書かれている。第一册（目錄、口圖、本文第一回―第三回）五五丁、第二册（第四回―第六回）五三丁、第三册（第七回―第九回）五〇丁、第四册（第一〇回―第一二回）五八丁。第四回は丁付は一九であるが、一五、一六の丁付が同丁中に重つているため實數は一八。また第一二回末に缺丁がある。第一册の封面は黃色紙に花案奇聞、女開科傳、何必居梓行と三行に刻す。卷頭目錄は有界、「女開科」と題し、次に改行して二行にわたり岐山左臣編次、蠡庵居士批評と題す。口圖は一二頁、第一一圖左下傍に「黃順吉刻」、第一二圖右上傍に「古越馬雲生寫」と見える。本文は左右双邊、無界、匡郭縱一八糎、橫一〇・五糎、

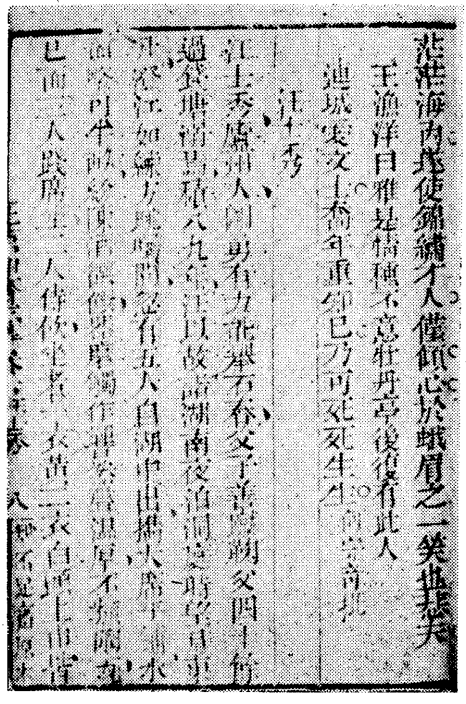
毎半葉八行、毎行一八字、回毎に丁付が改まる。版心は白口、丁數、回數の外に「花案奇聞」と刻す。内題は「女開科」、その次に「虎丘花案逸史」、その下に二行にわたり岐山左臣編次、江表蠡庵參評と見える。所藏印は柴野栗山の「柴氏藏書」と前掲「炎凉岸」に見られる渡邊刀水の二印及び竹内某の各方形朱印。

本書も清人某撰の全一二回の通俗小説で、四人の才子が詩社を作つていた四人の名妓をみて異とし、出資して衆妓を集めて科場を開いたが、それを惡少どもに中傷されて地方に逃げ後各々結ばれるという筋の、一種の才子佳人小説である。前記の孫氏の書目によると、大連圖書館にこの小説の名山聚（清）刊本があり、それと板式・圖が同じである「新採奇文小説全編萬斛泉」（一二回）という別の書名の一本があり、また坊間の「花陣奇」（六回）も同一筋であるという。女の科場を開くという趣向は他に見られぬ新奇なものであるから、そのために世に喜ばれて種々の刊本が出たのであろう。孫氏は日本寶歴甲戌（一七五四）の舶載書目に見えるこの小説の何必居梓行本は未見であるという。以上のことから、塾圖書館所藏の本書が珍重すべきものであること明らかであるが、なお本書が寛政三博士の一人柴野栗山の舊藏本であつたことは、本書が小説であるだけにはなはだ興味深く感ぜられる。

知不足齋原本批點聊齋志異卷六刊本　一册

大きさ縱一七・二糎、横一一・三糎。表紙及び本文全六六丁中の第一丁、第二丁缺。第六丁も一部分缺。本文は左右双邊、

無界、匡郭縱一三・四糎、横九・三糎、毎半葉九行、毎行二三字。版心は粗黑口で、「批點聊齋志異」、篇名、丁數、「知不足齋原本」と順に刻してある。所收篇及びその排列は青柯亭本（趙起杲刻本）卷六と全く同じである。本文を原稿（一九五五年北京文學古籍社發行影印本）及び青柯亭本と對比すると、字句に多少の相違が見られるが、全般的に本書の方に誤が多い。「劉海石」「狐聯」を除く一五篇には、他の刊本にみられぬ何守奇という者の批評がついている。鮑廷博の知不足齋叢書中に志異はないが、鮑は趙起杲に志異出版を勸めて出資している人であるから、自らも志異の鈔本を持つていて、それが本書の底本となつたものか？「選注聊齋志異選」（一九五六年北京作家出版社）の注釋者張友鶴氏はその編選後記中に、知不足齋本を底本とし、その裏封面には青柯亭本と稱していると記しているが、筆者の見た青柯亭本（一九五六年藝文印書館發行影印本）と塾中國文學研究室所藏の本書とは明らかに別本である。しかも趙起杲はその辯言の中で、鄭荔鄉所藏の原稿に據つたと明言し、知不足齋については前記のように出版勸誘と出資の事實だけしか記してないから、直ちに張氏の言を承認することはできない。張氏がなぜ知不足齋本と稱しているのか、その理由を知



りたいが、ともかくも右の矛盾する點は、志異出版經過の上に一つの問題を投じているものである。